



Title	社会制度としての市場と企業家活動との相互補完性：ハイエク・カーズナー・ハーパーの市場＝企業家論から
Author(s)	吉田, 昌幸; Yoshida, Masayuki
Description	企業家論は、「誰が企業家か」を問うものではなく、それを足がかりにして「経済活動の企業家性とは何か」を問うものである。言い換えれば、「企業家的」であるか否かについて問う時、それは経済主体ではなく経済システムの性質を検討することになる。このような問題に対して、本稿で取り上げる議論で共通しているのは、競争という概念から両者の関係性にアプローチしている点である。より適切な情報や知識が獲得できる競争は唯一市場において可能であるとするハイエクの市場論に対して、未利用の利益機会を巡る競争が企業家的であるとするカーズナーの議論では、利益機会を見いだす上で不可欠な制度として市場が用意されている。カーズナーと同じ市場と企業家活動に焦点を当てるハーパーは、しかし、両者の相互依存関係をより動的にとらえる。彼は、企業家的学習という概念をもって、経済活動のフィードバックの様式に企業家性を見いだすというカーズナーとは異なる議論を提示する。カーズナーとハーパーの議論から市場と経済活動の「企業家的な関係性」について明らかにするのが本稿の目的である。
Citation	経済学研究, 54(2), 81-98
Issue Date	2004-09-09
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/5258
Type	departmental bulletin paper
File Information	ES_v54(2)_05.pdf



社会制度としての市場と企業家活動との相互補完性

——ハイエク・カーズナー・ハーパーの市場＝企業家論から——

吉 田 昌 幸

はじめに

経済学の中で企業家とはどのような存在であるか。その歴史的な概念の推移について、ホセリッツ [1951] は次のように述べている。すなわち、企業家 *entrepreneur* という概念は、17世紀初頭のフランスでは、リスクあるいは不確実性の伴う大事業を自ら請け負う比較的小さな集団として定義されていた。そこでは、企業家は、製造業者や商人に対してではなく、植民地への入植、大聖堂、大寺院といった宗教的建設物の着工、そして道路、橋、港や防御設備などの建設・修理工事を請負うものとされていた。このように、事業の内容は時代によって変化するが、「社会的事業を請負う政府との契約者」に対して企業家という概念が適用されていることがわかる。一方、17から18世紀初頭のイギリスでは、このような活動をするものを請負人 *undertaker* や相場師 *adventurer* という用語でとらえられていた。これもまた、14、15世紀においては「ある責務の遂行を担う者」として、そして後には「政府によって課された責務を自分自身の責任において遂行する者」[Hoselitz 1960; 240] としてとらえられている。

現在このような活動を見れば、事業の遂行に伴うリスクないし不確実性を自ら請負い、必要な資源や人材を自ら集めて、その結果として利益を獲得するという点をもって、企業家的な経済活動と見なしうる。しかしながら、当時は事業を請負う主体を単に企業家と呼んでいただけであり、どのような経済活動の側面をもって企

業家としているのかという「経済活動の企業家性」について分析することはない。このような視点は、市場経済が浸透し、それに伴い市場理論が展開されていく18、19世紀から徐々に培われてくる。市場経済の下での経済活動の企業家性については、現実の市場経済の発展だけではなく市場理論の発展と切り離して議論することはできないからである。

したがって、現在われわれが「企業家とは何か」という問題を立てることは、市場経済の下での経済活動のどのような要素をもって「企業家」活動とするのか（経済活動の「企業家性」とは何か）、そしてそのような活動の重要性をどのような形で説明するのかということに焦点を当てて検討することを意味する。例えば、事業を遂行するに当たってリスク・不確実性を請負うことそれ自体は、市場経済が確立する以前においても以後においても経済活動の企業家性を示すことになるが、この企業家性を説明する上で市場理論は特別必要ない。それでは、説明するに当たって市場理論を必要とする企業家活動というものはあるのか。あるとすれば、それはどのような企業家性を指摘するために必要なのか。

このような問いについては、ハイエク、カーズナー、ハーパーによる現代オーストリア学派の市場理論と企業家活動論を参照することで答えることができる。なぜなら、これらの議論では、企業家活動の「企業家性」を説明する上で、市場の存在が不可欠となっているからである。その意味で、企業家活動と市場は相互補完的な

関係にある。また、カーズナーやハーパーの企業家活動の議論はハイエクの市場論を前提としている点で議論の上でも両者は相互補完的な関係にある。本稿では、第一節においてハイエクの市場論を、第二節においてはカーズナーの企業家活動論を、そして最後の節ではハーパーの企業家的学習の理論を見ていくことによって、このような社会制度としての市場と企業家活動との相互補完性という現代企業家論の特徴を明らかにしていく。

1. 社会制度としての市場の存在意義

制度としての市場の社会的重要性はどこにあるのか。新古典派経済学の完全競争市場についての議論では、市場は効率的な資源配分をもたらすという社会的重要性を有しているとされる。そこでは、効率的な資源配分をもたらす均衡価格が決定されるのであり、ひとたび達成された均衡価格は与件とされる条件が変化しない限り変更されることはない。したがって、市場過程の中での消費者の好みの変化（あるいは生産技術の変化）は、「消費者の好み（あるいは生産技術）の変化によって、最適な資源配分の状態がどのように変化するのか」という形で議論することはあっても、「なぜどのようにして最適な資源配分をもたらす市場の過程で消費者の好みや生産技術が変化するのか」という形で議論することはない。

このように、完全競争市場という視点は、ある時点における資源配分の効率性について議論することがその目的であるから、そこで与件とされている事象がなぜ・どのように変化するのか、そして市場のどのような側面がこのような与件の変化をもたらすのかについて議論することはない。さらに言えば、市場の社会的重要性が専ら効率的資源配分にあるとすれば、その目的を達成した市場は不要なものとなる。市場が常にその機能を十分に果たすのであれば、なぜ市場は無くならないのか。それは市場がまだそ

の調整する過程にあり、与件も常に変化しているからということになる。

そうであれば、社会制度としての市場の存在意義は、目指すことはあっても達成されることのない「効率的な資源配分」にあるのではなく、その過程に伴って生じる事柄の中にあることになる。したがって、問うべきは、市場がその過程でどのような副産物を生み出し、そこに企業家活動がどのように関わっているのか、ということになる。このような視点は、カーズナーやハーパーらの議論に限らず、シュンペーターの議論を検討する上でも重要である。

シュンペーターの議論では、企業家活動はイノベーションによって市場に新たな状況の変化をもたらすが、その時にはイノベーションのコアとなる技術等の発明ないし発見が研究所等によって既になされている必要がある。蓄積された様々な知識や技術情報等を新商品や新生産技術に体化させる企業家活動に重要性を認めるシュンペーターの議論では、市場は知識や技術等を新しい商品や技術という形に体化させる誘因をもたらす機能をもつ。もし、社会制度としての市場の機能がすでに与えられた条件のもとでの効率的な資源配分の達成だけであれば、このような知識や情報の商品化という側面は看過されることになる。シュンペーターの議論では、企業家活動の目的は利潤最大化にあるのではなく社会的な地位の向上にあり、利潤最大化はその手段として位置づけることができる。したがって、市場は社会的地位の向上の手段としての側面を持つのであり、その過程で市場には新たな商品の供給や新たな生産方法の導入による変化がもたらされる。

このようにして、企業家という視点から市場を見ることによって、市場過程によってもたらされる副産物に焦点を当てることができる。それでは、その時の市場メカニズムについてはどうか。シュンペーターにとって、市場は「各経済期間において踏みならされた道を繰り返したり、同一の価値を繰り返し実現する」

[Schumpeter 1926=1977 : (上) 102 頁] という定常性をもつことにその特徴がある。

「たとえ外的条件が変化するとしても、全く新しいことを行うのが問題なのではなくて、従来行ってきたことを新しい条件に適応させることだけが問題」[*ibid.* : (上) 103 頁] であるとするように、市場の定常性という性質は、外生的諸条件の変化にさらされつつも個々の経済活動による内生的適応によってもたらされる性質だということになる。そこでは、「与えられた条件のもとにおいて、存在する手段と充足すべき欲望との間の均衡をできる限り最善に樹立するような種類の経済行動」[*ibid.* : (上) 103-04 頁] が利益を追及する形で形成されていく。

このように、シュンペーターの議論では、市場の定常性は経済活動の定型性にその原因があり、経済活動の定型は「その個人が従来よりも不利になる経験をしない限り、変更することができない」[*ibid.* : (上) 104 頁]。彼の議論では、この「不利になる経験」をもたらしひとつの原因として、外生的な与件の変化の他にイノベーションを遂行する企業家活動が含まれている。このような、市場の定常性をもたらず定型的な経済活動と、自らの活動の結果として経済活動の定型性を攪乱する企業家活動という対比は、実はハイエクとカーズナーの市場・企業家論から現れてくる市場経済像と類似している。

ハイエクは、市場それ自体のメカニズムに対して競争という視点をもってアプローチする。そこでは、「ある特定の仕事に特別に適した知識を持っている不特定の人々が、その特定の仕事に引きつけられやすいようにするためには、どのような制度的仕組が必要なのか」[Hayek 1946=1990 ; 96, 131 頁] という問題を立て、「真の説明においては競争過程の結果であるとして説明しなければならない状態を、始めから存在するものと想定している」[*ibid.* ; 94, 130 頁] 完全競争均衡における理論を批判する。

ハイエクのこの議論は、市場の過程とは競争の過程であり、それは生産費用の最小化を目指

し、消費者が欲する財とサービスの種類と価格についての情報を獲得していく過程である。さらに、ハイエクの言葉を借りれば、「各々の生産者が自らの経験から、他のすべての生産者たちと同じ事実を習得するばかりでなく、彼の仲間たちが何を知っているかを知りようになり、その結果彼自身の生産物に対する需要の弾力性をも知るにいたる」[*ibid.* ; 98, 134 頁]。これは、自らが直接遂行するばかりではなく、自分よりも適切な知識や情報を持っている者がいればその人が遂行するという、誰がもっともわれわれの欲求に応えるかをわれわれが知ることができるようになる過程でもあるということを示している。

このような視点からすれば、「完全競争と不完全競争とを分かち溝よりも、競争と無競争とを分かち溝の方がはるかに大きい」[*ibid.* ; 105, 143 頁]。なぜなら、近似的な代替品の種類が多くかつそれが激しく変化している市場、利用可能な代替物の相対的な長所を見極めるのに長い時間を要する市場、そしてあらゆる種類の財やサービス全体に対する欲求が不規則な間隔を置いて非連続的に発生する市場では、適応されるべき条件の変化の速度に比べて、それに対する適応の速度が遅いという共通の性質をもつからである。このような市場では、どれほど完全競争市場の条件が備わっているか（完全競争か不完全競争か）ということを議論するよりも、このような市場過程が均衡へと向かう駆動力は何であり、その駆動力はどれほど強いものなのかについて（競争か無競争か）議論することの重要性が高くなる。

それでは、絶えざる与件の変化にさらされており、個々の経済活動による競争が均衡へと導く駆動力となるという形で市場のメカニズムを論ずることで、効率的な資源配分以外に市場の社会的機能を示すことができるのだろうか。これについては、「ある特定の仕事に特別に適した知識を持っている不特定の人々が、その特定の仕事に引きつけられやすい」[*ibid.* ; 95, 131

頁] 制度として市場をとらえていることを手ばかりとして考えることができる。

第一に、市場では、その過程を通じて生産者は利用可能な生産要素と生産技術を用いて利潤の最大化を追求し、消費者は自らの嗜好に基づいて効用の最大化を追求するとされる。しかしながら、実際には利潤も効用も最大化されることはない。これには2つの原因がある。ひとつは、単に市場が均衡状態へ到達する前に与件が変化してしまうことであり、もうひとつは、与件として自らが利用ないし依拠する技術や嗜好の特徴ないしそれらに基づくモノやサービスに対する評価を客観的に示すことができないことである。

ハイエク自身が例にあげるように¹⁾、経済活動にとって「砂糖」の評価はその「化学的な成分」といった客観的な性質に基づいてなされるのではなく、人々が「砂糖」を求める時に充たされる「必要」という主観的な性質によってなされる。自ら利用する技術の特徴についての評価や自らが依拠する嗜好に基づく様々なモノやサービスの評価があらかじめ客観的な形で与えられている完全競争市場では、利潤や効用の最大化ということをもって市場の機能を説明するのに十分である。しかし、むしろ問題なのは、利用する技術の評価や嗜好に基づくモノやサービスに対する評価がどれほど適切なものであるのか、さらに言えば、利用可能な技術や自らが依拠する嗜好がどのようなものであるのかについて、どのような様式で知ることができるのかということにある。

完全競争市場の条件に基づいて各生産者にど

の製品をどれほど生産するかを指令することによって、効率的な資源配分を実現することはできないとするハイエクの議論は、利用できる生産技術や消費者の嗜好についての適切な情報や知識に基づいて、各生産者がどの製品をどれほど生産するか判断を下さなければならないということを示している。ハイエクによれば、このような情報や知識を獲得して、利用可能な技術や嗜好についてのより適切な判断を自ら下すことができるようになることが市場過程の重要な側面なのであり、これは他の制度に取って代ることのない市場特有の機能となる。

この時、市場における競争とはこのような知識や情報を獲得していく方法、ハイエクの言葉を借りれば、「特定の一次的な目的の達成に関連する特定の事実を発見する方法」[Hayek 1978; 181]ということになる。市場はこのような意味での競争を促す制度としての存在意義を持っていることになる。市場は個々の主体全体にこのような競争を促し、それらによって「競争的秩序²⁾」が形成される。市場を通じて形成されるこの競争的秩序は、その秩序の下で経済活動を営むことにより適切な知識や情報を獲得していくと同時に、この個々の経済活動が当の競争的秩序を形成するということになる。

ハイエクによれば、「価格メカニズムを利用

2) ハイエクは、「『自由』企業と競争的秩序」(1947)の中で次のように述べている。「私が『競争的秩序』という言葉によって意味するものは、『秩序ある競争』としばしば呼ばれているものと、ほとんど正反対のものであるということだけをただちに付け加えておかななくてはならないだろう。競争的秩序の目的は競争を働くようにさせることであり、一方、いわゆる『秩序ある競争』の目的はほとんど常に競争の有効性を制限することである」[Hayek 1947=1990; 111, 152頁]。ここでハイエクは、「競争ある秩序」と「秩序ある競争」という対比で自由経済と計画経済との特徴を述べている。この「競争ある秩序」は「全体としていかなる個人や諸個人の小集団に知られていない多くの異なる個々の目的の達成に非常に貢献する」[Hayek 1978; 183]という「自生的秩序」と同じ性質をもつ。

1) Hayek [1937=1990]の脚注18において次のように述べている。「経済理論のすべての命題は、事物をそれに対する人間の態度に基づいて定義して、事物に言及する。すなわち、経済理論が時として言及する『砂糖』は、その『客観的』な性質に基づいて定義されるのではなく、人々が、砂糖は彼らのある種の必要をある仕方で充たすものと信じているという事実にもとづいて定義される」[Hayek 1937=1990; 76頁]。

する理由は、諸個人が行っているまたはできることが、彼らの責任ではない理由によって、より少なくあるいはより多く需要されるようになってきたことを彼らに知らせること」にあり、「変化した環境に対して活動のすべての順序を改めることは、変化される別の活動から導き出される報酬によるのであり、それらの長所や短所について顧みることはない」[*ibid.*; 187]。これによって分かることは、市場が、価格シグナルによってもたらされる情報を通じて各々が所有している知識の不完全性に気づかせる制度であるということ、そして、経済活動によってもたらされる報酬（または報酬の期待）次第で新たな知識や情報に基づく経済活動の変更が容易にできる制度だということである。

「仲間の期待をみたそうとする誰かの失敗によってもたらされたギャップに対して、他の誰かが介入しそのギャップを埋めるように誘導されるのはただ市場メカニズムのおかげである」[*ibid.*; 187] とするハイエクの議論をみると、競争的秩序の下で個々の主体は事前に何をどれだけ生産すべきであるという情報を市場から受動的に得るわけではない。本来、「受けるに値すると他者が考えるものを得る経済システムは必然的に非常に非効率的なシステムになる」[*ibid.*; 188] というように、市場は完全競争市場によって想定されるような効率的なシステムではない。したがって、「数多くの個人が配慮のある指示や命令が起きないような仕方での生活様式を調整することを必要とさせるある種の非人格的な強制」[*ibid.*; 189] が必要となる。この時、市場によって形成される競争的秩序はこのような「非人格的な強制」をもたらす。

競争的秩序の下では、経済活動は最大化以前に自らの嗜好や利用可能な技術の評価を下すのに用いる、適切な情報や知識を収集・獲得していかなければならない。このような競争的秩序の下での市場過程は、「発見された時には他者によっても利用されうる未利用の機会を、探鉱者が探索するという探求の過程」[*ibid.*; 188]

なのであり、ここでの「探鉱者 prospectors の探索活動」とは単なる最大化活動ではない。従って「ある特定の仕事に特別に適した知識を持っている不特定の人々が、その特定の仕事に引きつけ」[Hayek 1946=1990; 96, 131 頁] られる社会制度としての市場の特徴は、最大化活動よりも探索活動によって説明する方がよいことになる。

2. 企業家活動にとっての市場の必要性

社会制度としての市場は、効率的な資源配分をもたらす制度としてよりも、市場の過程において次のような事柄を可能にする制度として重要性を持っている。すなわち、市場はその過程において、消費者は自らの嗜好にもとづいて適切な判断を下すことができるようになり、生産者は利用可能な生産技術が何であるかを認識させ、それらを適切に組み合わせることができるようになる。ハイエクの議論は、生産者あるいは消費者が競争的秩序の下で適切な知識や情報を獲得していくことのできる制度として重要であることを示している。このような形で市場の存在意義を示すことは、最大化主体という形で経済活動を議論するのではなく、むしろ探索主体という形で経済活動を議論する必要がある。

それでは、このような社会制度としての市場の下で、企業家活動はどのような点から重要性を持つ活動とされるのだろうか。カーズナーは、市場には「単に与えられた市場データに対して反応するのではなく、むしろそれらのデータの起こりうる変化に対する企業家的機敏性」[Kirzner 1973; 39] が不可欠であるとしている。このような企業家活動は、市場経済が発達する以前における「社会的事業の請負・遂行者」としての企業家としてではなく、市場という社会制度の補完的な存在として重要性をもつことを示している。

このようなカーズナーの議論は、市場経済社会では「企業家も農業経営者も資本家も何を生

産すべきかを決定しない。それを決定するのは消費者」[Mises 1966=1991; 295 頁] であるとするミーゼスの議論と共通する視点をもっている。そこでは、市場という社会的制度を通じて「無慈悲なボスであり、気まぐれで移り気で、変わりやすく、予測ができない」[*ibid.*; 295 頁] 消費者の需要が的確に予測され、いち早く充足されることを可能とする制度としての市場存在意義が現れてくる。

例えば、商品Aを生産している企業が商品Bの生産によって得られる期待収益の方が高いと見込み、従来商品Aの生産に投入していた生産要素を商品Bの生産へと転用することによって新たな利益を獲得したとしよう。このとき、期待収益の見込みを通じて、商品Aに対する需要よりも商品Bに対する需要の緊急度が高いという潜在化されていた状況の認知とそれに基づく要素投入の変更が、市場での経済活動の特徴となる。

この場合、この企業が商品Cに対する需要の緊急度が高いという潜在化されている状況を発見することにより、商品Cを新たに供給するということがあってもよい。また、商品Aの需要はあるが供給されていなかった地域へ販路を拡大するということもありうる。いずれにしても、存在するが未だに享受されていない利益機会を発見しそれを活用して新たに利益が獲得できたのであれば、その経済活動は企業家活動ということになる。したがって、商品Aを生産している企業が「商品Bあるいは商品Cに対する未充足の需要がある」または「別の地域において商品Aの需要がある」という状況を「利益機会」として発見し、商品Aの市場から別の商品市場への生産要素の移転や、商品Aの販路拡大といった経済状況の変化をもたらす。カーズナーは「このような発見の継起が均衡化過程を構成するものとして（下線原著）」[Kirzner 1992; 44] 論じている。

このような、未だ享受されていない利益機会をいち早く発見するという企業家的機敏性は、

ハイエクの競争的秩序の下での探索活動と類似している。それでは、競争的秩序の下での探索活動を通じてより適切な資源の利用を可能とする制度としての市場というハイエクの視点と、企業家的機敏性という視点から市場の調整機能を議論するカーズナーの視点との違いはあるのだろうか。

そもそも、カーズナーによれば、企業家活動は「資源市場における取引と製品市場における取引との間の不完全な調整」[*ibid.*; 44] に起因する未利用の利益機会を発見していくことであるが、そのような「企業家の発見は、慎重な学習行為でもないし、探索行為でもない」[Kirzner 1997=2001; 37, 60 頁]。つまり、企業家的機敏性は単に利益機会に気づくということなのであり、ハイエクの議論にあるように競争的秩序の下ですべての経済主体に求められる「自らの情報・知識の不完全性」に気づく探索活動とは異なる。

カーズナーによる企業家活動は、「未利用の利益機会」という「潜在する裁定取引機会」を発見する企業家的機敏性に基づくのであり、これはハイエクの議論と同じではなく、二つの意味でハイエクの議論と補完的な関係をもつ。第一に、市場によってもたらされるシグナルを通じて個々の経済主体が自らの知識の不完全さに気づくという視点に焦点を当てたハイエクの議論と、主体的に裁定取引機会を発見し、それを自らの利益獲得の手段としていく企業家活動を論じるカーズナーの議論との補完的な関係である。

言い換えれば、「新しい生産物の導入や新しい生産技術の導入というより、どこで新しい生産物が思いもかけずに価値のあるものになるのか、あるいはどこで新しい生産方法が適したものとなるかということを知ることでできる能力（下線原著）」[Kirzner 1973; 81] としての企業家的機敏性によって、「需要が満たされていない市場状況」や「非合理的な生産方法の採用」という「未利用の利益機会」を発見する企業家

活動は、最大化主体を前提とした市場ではなく、ハイエクのような探索活動を前提とした市場の下で議論することではじめてその重要性を示すことができる。

また、社会的制度としての市場の存在意義を議論する上で、ハイエクの述べる探索活動とカーズナーの述べる企業家活動が補完的な関係になっている。例えば、商品 a を生産する企業 A にとっては、市場情報（生産コストや販売量ないし販売価格等）の変化を通じて、商品 a を生産するにあたって現在利用可能な生産方法・技術がどのようなものであり、そしてそれらを適切に用いているかどうかについて判断する活動と、未利用の利益機会の発見という利用可能な生産方法・技術をもって生産可能な商品群の拡張を遂行する企業家活動との二つの経済活動を通じて利益を追求していくことになる。このように考えれば、探索活動による「損失機会の縮小」と、企業家活動による「利益機会の拡大」との二つの経済活動を議論することによって、市場の存在意義が示されることになる。

シュンペーターの議論では、利益追求をその目的とする定型的な行動様式に基づく経済活動は企業家活動によって攪乱されるが、それによって新たな定型活動をもたらすという定常性を市場はもつのであり、このような市場の性質は企業家活動によって変化するわけではない。「定型活動」を「探索活動」に、「市場の定常性」を「市場の競争的秩序」と置き換えれば、学習活動と企業家活動というハイエクとカーズナーの議論とシュンペーターの議論に類似性があることがわかる。しかしながら、企業家活動と市場との関係性について両者は異なる。なぜなら、シュンペーターの議論では企業家活動が定常性という市場の特性をもたらすわけではないが、カーズナーの議論では企業家的機敏性なしには市場過程それ自体が成立しないからである。

このように、ハイエクとカーズナー流の市場・企業家論は、社会制度としての市場と企業家活動との相互補完性を学習活動と企業家活動との

補完性という形で議論するものとしてとらえることができる。これによって、企業家活動は、既に存在する利益機会を発見していくことにより市場の機能を補完するということがわかる。しかしながら、これらの議論では、自ら遂行した経済活動の結果から、新たな事柄を学ぶという視点については言及されていない。そのような視点は D. ハーパーによる『企業家機能と市場過程』（1996）のなかに含まれている。

3. 企業家的学習と市場制度の補完性：ハーパーの企業家活動論

ハーパーによれば、企業家活動とは「構造的な不確実性と複雑な状況において誤って特定化された問題を同定し解決するように意図されている利益追求活動」[Harper 1996: 3] であり、このような企業家活動が市場に「目的手段の新しい枠組みの発見と創造を伴う」[ibid.: 3] 過程をもたらすとする。つまり、知識の不完全性の発見でも、市場における裁定取引機会の発見としての企業家活動でもなく、企業家的学習が社会制度としての市場特有の経済活動であることを示している。市場の下でなぜ企業家的な意思決定が継続的に必要とされるのかについて、ハーパーの議論は知識の成長という機能を持つことになる。以下では、市場過程、企業家活動、そして企業家的学習による知識の成長というキーワードをもって、市場という社会制度の下での企業家活動の重要性、そしてそこから現れる市場の存在意義をハーパーの議論から抽出していく。

3-1 市場過程の動態性

シュンペーターは社会制度としての市場には定常性があるとし、ハイエクは自生的に形成される競争的秩序に社会制度としての市場の特性をみていた。それではハーパーはどうか。彼によれば、自らが批判的に継承するカーズナーの議論では、発見と競争をとまなう市場過程の駆

動力が企業家活動であるとされている。すなわち、「均衡への適応過程は、経済環境における外生的な変化を認識し、市場参加者の意思決定の調整におけるギャップを発見し、新しい市場状況へと能動的に適応させる企業家の活動の結果として現れる」[*ibid.*: 16]。ハーパーにとって、このような議論は、経済活動によって市場の均衡化過程を分析することはあっても不均衡過程を分析することがないという点で不十分なものだということになる。

すなわち、これらの議論では、「データの変化、すなわち選好の推移、資源の変化そして新技術の発明に対する適応的反応のみで構成されている」[*ibid.*: 16] ものとして市場過程をとらえており、そこでは「適応的反応」という内生的な均衡化要因と「データの変化」という外生的な不均衡化要因の組み合わせによって市場過程が形成されることになる。しかしながら、不均衡要因のすべてが外生的なものではなく、その中には経済活動の結果もたらされる内生的なものもあるはずである。それでは、内生的な不均衡要因とはなにか。ハーパーはこの問題について企業家活動がその原因となっていることに着目する。「企業家は、ある投入物に対してどんな新しい使用が起こりうるのかについての推測や、どんな新しい技術を得ることができるのかについての推測に加えて、消費者の嗜好が何であるのかについての理論を常にもっている(下線原著)」[*ibid.*: 18] のであり、ハーパーはこのような推測や理論(以降これを「企業家的推測ないし知識」と呼ぶ)に市場の不均衡化要因としての側面があることに着目する。

そこで、ハーパーは市場の動態性を次のようにとらえ直す。すなわち、企業家的知識に基づいて認識された市場状況から利益を迫及することで形成される「内生的な均衡化過程」と、企業家的知識の変化によってもたらされる「内生的な不均衡化過程」という、二つの特性を、市場の動態性として説明する。したがって、仮に新技術の発明・発見を活用するイノベーション

や消費者嗜好の変化という外生的な変化にさらされない市場状況にあっても、企業家的知識の変化によって市場状況の変化が生じる。このように、ハーパーは市場が常に変化する環境にさらされているからというよりも、市場の下で培われる企業家的知識の変化が動態性の主たる要因として見なしている³⁾。

3-2 構造的不確実性下での企業家活動

それでは、社会制度としての市場の下での内生的な不均衡化要因となる企業家的知識の変化は、なぜ・どのようにして生じるのか。この点について、ハーパーがどのように考えているのかについて検討することは、社会制度としての市場の存在意義について企業家的学習という視点からアプローチすることにつながる⁴⁾。そもそもハーパーは企業家活動をどのようにとらえているのか。ハーパーによれば、経済活動が企

3) ハーパーは自らのアプローチの特徴を「知識の成長論研究プログラム」としており、その特徴をプログラムのハードコア、肯定的発見法、否定的発見法とによってまとめている。この点については、ハードコアの二つ目に、「経済主体は客観的な問題状況に直面し、ある客観的な実在は個々の経済主体の推測や選好の影響を受けないように存在している。しかし、客観的な問題状況は経済主体によって自動的に知られたりすることはないし与えられてもいない。個々の経済活動主体は自分自身で見つけたその状況を定義し解釈しなければならない」[Harper 1996: 20] とされている。またそれに関しては肯定的発見法の五番目に現実の時間と知識との間の関係がはっきりとわかる動態的なモデルを構築し、経済主体の知識や学習過程を内生的なものとして扱うモデルを発展させる[*ibid.*: 22] と示されている。

4) ハーパーは *Entrepreneurship and the Market Process* (1996) のなかで、議論の焦点を次のように要約している。「市場経済での推測や論駁の組織のパターン、市場が企業家的推測を選別する規準、競争的市場過程の起源や学習メカニズムの本質に対するこれらの議論の含意、新しい推測を生み出し選別する市場過程の比較性能、いかにして市場過程は内生的諸力(すなわち、外生的なショックとは反対のシステム内の諸力)によって永続させられるのか」[Harper 1996: 7]。

業家的である所以は、「新しい市場問題（と潜在的な利益機会）の発見，ありうる解決策の創出（例えば新製品のアイデア），ひとつのあるいはより望ましい解決策の選択，選ばれた解決策の試験的な履行，そして，問題を解決するそれらの試みについての批評的な評価（下線引用者）」[*ibid.* : 87] といった，一連の意思決定過程にある。したがって，経済活動それ自体が企業家的であるか否かというよりも，経済活動に伴う意思決定が企業家的であるかどうかが重要になる。

この企業家的意思決定の特徴は，計画的な思考力でも機敏性でもなく「批評的想像力 *critical imagination*」という概念によってあらわされている。企業家的意思決定の過程は，自らの企業家的知識に基づいて利益追求活動の対象である問題状況を設定する過程（発見→創出→選択）とその結果に対するフィードバックの過程（履行→評価）との二つの過程に分けることができる。批評的想像力とは，一連の意思決定過程における「能動的，自生的，直観的，そして前論理的な認知過程」[*ibid.* : 88] の特徴をあらわすものであり，企業家的知識はこのような認知過程を通じて形成される。

このようにして形成される企業家的知識は，「せいぜい勘 *hunches* として述べることができる大胆でまだ具体化されていない推測からはじまる」のであり，それは「暗黙的で私的で主観的な性質」[*ibid.* : 223] を多く含む。したがって，企業家的知識は明示化・客観化させる必要がある。また，このような企業家的知識は構造的な不確実性と現実の時間の下で形成されていくものであり，企業家的学習（履行→評価）の過程を通じて改訂されていくことを必要とする。ハーパーの議論では，市場という社会制度が企業家活動を必要とするばかりではなく，このような企業家的学習を遂行する上で市場という社会制度が必要となる。

それでは，ハーパーの議論において，市場という社会制度の下での企業家活動の存在意義は

何か。これについては，市場が構造的な不確実性と現実の時間にさらされているからという回答を与えることができる。市場経済では，個々の事業を遂行するに当たって，すべてのありうる行為の経路やある所与の行為に起因するすべてのありうる帰結に関する完全なリスト」[*ibid.* : 96] を列挙することができない。このような意味で，経済活動をする上で将来の事象についての不確実性は不可避の事柄となる。

しかも，この不確実性は，「意思決定者が世界の与えられた状態のどれが将来生じるのかについては不確かであるが，どの世界の将来の状態がありうるものであるかについては確信している」[*ibid.* : 94] パラメータ的な不確実性とは異なる，構造的な不確実性と呼ばれるものである。さらに，個々の事業は多かれ少なかれそれぞれ特有の状況にさらされているので，過去の類似の事業を参照して意思決定を下すにも限界がある。このような状況にさらされている市場は，企業家活動の誘因をもたらすことによって，社会制度としての特性を発揮することになる。

もちろん，このような不確実性は，次のように様々な制度的要素によって制限が課されている。「第一に，どの社会にも社会現象に斉一性と規則正しさを与えるある種の秩序がある」[Harper 1996 : 103]。例えば非公式の習慣や社会的規範といったものが個々の行動に制約を課す。第二に，所有権，契約，貨幣，コラボレーションの協定やのれんや評判といった制度的枠組は，構造的に不確実な市場状況の下で将来の帰結からより容易に利益を生み出すことができるような形に自然と変化していく。

第三に，高い不確実性にさらされた新しい取引を組織する必要から，統治構造が企業家活動によってもたらされる。この統治構造内部のヒエラルキーによって，所有権という境界が取り除かれ，他者の意思決定に関する知識の移転を促進する共通の組織的言語やコミュニケーションの経路が生み出されるので，構造的な不確実性が縮減されることになる。このように，構造的

不確実性ということから、市場という制度の下で統治構造として現れてくる企業組織の存在意義を示している。

このように、市場経済の下では様々な制度によって経済活動に伴う構造的な不確実性に対して制限を設けることができるが、経済活動が市場の下でなされる限り構造的な不確実性という問題から逃れることはできないのであり、企業家的学習という市場における企業家活動の存在意義それ自体なくなるわけではない。

それでは、企業家活動が市場という制度を積極的に必要とする理由はなにか。これについては、構造的な不確実性の下での企業家的な一連の意思決定の過程において次のような状況があるからである。すなわち、推測されたある市場状況から利益機会を見いだす際に依拠する企業家的知識それ自体が適切なものではなく、結果として利益機会が発見できなかつたり、当初見いだしていた利益機会が利益を獲得していく実行過程で消滅したりするかもしれない。さらに、ある時点において利益機会を見いだしてそこから利益を生み出したとしても後の時点において当の市場状況が消滅してしまうこともある。したがって、このような状況の下では、事業の組織化とそれによる定型行動の形成による不確実性の対処というよりも、企業家的知識それ自体がどれほど適切なものであるのか、そして適切でなければそれを改訂する契機を与える制度が企業家活動にとって重要となる。そして、この制度として重要なのが市場だというのがハーパーの視点である。

3-3 企業家的知識の構成

企業家的知識の改訂、すなわち企業家的学習をする上でなぜ市場が必要なのだろうか。ハーパーによれば、企業家的知識は理論体系とそれを体系化する方法論とによって構成されている。企業家活動にとって、「経験の状況を解釈し理解し秩序を課す基礎」として「行為と制御のための枠組みを提供する」[*ibid.* : 136-37] 理論

体系は、例えば特定の市場や産業に対する理論や市場の特定の部分に対する理論、さらに諸市場の集合に対する理論といった異なる理論によって構成されている。このような理論体系は、多くのそれぞれに異なる要素を全体的に一貫したものへと結合させて構築されていかなければならない。企業家的学習とは、それらの要素の相互矛盾や意味のないものを可能な限り最小化していく作業であり、その作業に必要な不可欠な制度として市場が存在する。

それでは、このような企業家的学習という形で改訂されていく企業家的知識はどのような構成になっているのか。ハーパーによれば、この理論体系は、形而上的原理、経験的理論、そして予測という三つの構成要素からなる。形而上的原理とは、思索的なもので曖昧かつ不明瞭であるが、当該主体にとっては信念 (*articles of faith*) としての役割をもつ要素であり、長期間にわたって安定した性質をもつ。このような形而上的原理は、検証することができないが、ベンチャー事業の遂行という段階になれば、検証可能な経験的理論へと展開させることができる。教条的な意思決定をもたらす要因ともなる形而上的原理は、その結果企業家的学習を妨げる要因ともなるが、その一方で新たな着想や発見の要因ともなるのであり不可欠な企業家的知識の部分である。

経験的理論は、潜在需要の理論、生産の理論、そして統治・組織・取引の理論という三つの部分から成り立っている。潜在需要の理論は未解決の消費者の問題のなかでもっとも緊急なものはなんであるかについての推測と、潜在需要を充たす新しい製品特性の束についての仮説を扱う。さらに、対象となる消費者が新商品を喜んで買う価格・数量・品質の構成についての推測をも含む。それでは、企業家的知識の中になぜ潜在需要の理論が含まれているのだろうか。それは、社会制度としての市場は、個々の主体に需要関数をあらかじめ与えるような制度ではないからである。ハーパーによれば、市場はその

試行錯誤の過程を通じて需要の配置 (the constellation of demand) を自ら発見していくことができるものとして存在している。したがって、市場制度の下での需要の配置を発見していく過程は、ある新商品に対する需要関数を発見していく過程だけではなく、ある特定の状況において消費者がどのような製品特性をもった商品を必要するののかについての発見過程でもある。

それでは、なぜ・どのように市場制度の下で需要の配置を発見していくことが可能になるのか。それは、潜在需要の理論を形成していく上で、消費者の行動を説明・予測し、市場における需要を細分化するために状況分析という方法を企業家が用いるからである。状況分析とは、異なる需要スケジュールをもっていると推測される消費者集団や、違った使用状況では実質的に異なる製品特性を要求すると推測される消費者集団を同定していくことで、消費者全般を異なる消費者集団へと細分化していく方法である。消費者の目的や知識、購買状況における身体的・社会的そして一時的な要因などといった、個々の消費者がさらされている状況についての客観的な要因を同定することによって消費者需要を把握する企業家のこの方法にとって、市場は個々の企業家によるこれらについての推測の誤りを認知させる制度として必要不可欠な存在となる。

その一方で、企業家的知識としての潜在需要の理論は市場競争における独占力の源泉ともなる。たとえば、潜在需要理論Aによって成功した企業家Aがいたとき、潜在需要理論Bをもつ企業家にとっては、企業家Aの成功の要因を知ることができない。したがって、企業家Aは一定期間独占的な立場を確保することができる。このように、ハーパーの議論では、個々の企業家活動による需給ギャップの発見をめぐる市場競争というカーズナーの議論とは異なり、独占力の源泉としての潜在需要理論を構築していくことをめぐる競争という形態をとる。この時、社会制度としての市場は、様々な潜在需要理論を選択する制度としての存在意義を持つことに

なる。

企業家的理論の二つ目の要素である生産の理論は、所与の投入物を新製品へと組み合わせる技術的可能性と新しい投入物の組み合わせから所与の製品を獲得する技術的可能性についての推測を行う際の論拠となるものである。需要関数同様に生産関数もあらかじめ与えられているわけではないので、企業家的理論としての生産理論にとっては経験的要素（すなわち、生産要素のいかなる投入決定も確かさをもってその結果を知ることができないような環境での、生産過程を通じて蓄積される情報・知識）が決定的に重要となる。例えば、どの資本設備を用いるか、採用した資本設備をどの水準まで利用するのかといったことについての意思決定は、製品をいくらで販売するのかという消費者の需要についての推測による。経験的要素は単に生産の過程ばかりではなく販売の過程からも培われるので、生産の理論は企業家的知識の他の要素と切り離して形成されていくものではない。

企業家的知識の統治理論という要素は、異なる種類の企業家的取引を遂行するために工夫される統治構造についてのアイデアの源泉となるものである。言い換えれば、この理論はそれぞれの企業家活動にとっての企業をどのように用いるのかについての論拠となる部分である。ハーパーが述べるように、いかなる経済取引においても、純粋な市場のみ、あるいは企業のような階層組織のみにて行われるわけではなく、それらの組み合わせによって経済取引が行われる。例えば、ベンチャー事業を遂行する上で、統治理論は企業の内部組織をデザインする場合だけでなく、他の企業とどこまで協業するのかという企業間関係をデザインする場合にも適用される。

構造的不確実性にさらされている企業家的知識は、誤って配置された資源を他の使用法や他の使用者へと配置替えする機会について必ずしも正しい仮説をもたらすわけではない。特定の生産技術によって用いられる資源の特性につい

て誤った推測をもたらすかもしれないからである。したがって、統治理論に基づく推測は、実際に資本財を企業内部において次善の目的であるとされるものへ向けるたびに、あるいは企業家が資源を企業外部の他のふさわしい使用者に販売したり賃貸したりするたびに厳しく検証される。

企業家活動の成功は、変化する経済状況に対して統治構造をより敏感に適合させることのできる統治理論に基づいている。例えば、市場状況の変化に応じて、企業内部で用途を変更することによって調達してきた資源を企業外部の要素市場から調達するようになるといった形で市場を利用するし、外部で調達された資源のためにより洗練され専門化された契約形態を用いることもある。あるベンチャーが成功するか否かは、外部に任せることのできない確固たるイノベーション活動へと限定された資源蓄積を集中することができるかどうかにかかっている。統治理論を軽視し、生産関数という技術的背景のみから企業をみるような企業家的知識からは、自らの失敗の原因がこの統治理論によるものであることに気づくことがない。このように見れば、企業家的知識の中で市場状況の変化に対して最も敏感なのは、潜在需要の理論でも生産の理論でもなく、統治理論ということになる。

潜在需要に対する洞察と生産の理論と統治の理論を組み合わせることによって、個々の企業家は独自の仮説に基づいて予測を行う。「ある空間と時間の領域において、利益機会が存在する」という企業家の予測は、単に未知の将来事象に対する企業家の予言が示されているだけではなく、企業家が説明を加えたい既知の経済事象の描写や過去の市場の歴史についての主張をも含んでいる。市場経済が発展する以前においても以降においても、企業家活動には適応性というよりも主体性という側面があるが、ハーパーの議論からは企業家活動の主体性は、単なる将来の変化に適応するために予測するというのではなく、将来の予測すべき事象が何であり、

それらをどのようにとらえるべきなのかという企業家の予測の対象それ自体を決定するという側面に見られる。

3-4 社会制度としての市場の特性と企業家活動の相互補完性

ハーパーは、社会制度としての市場を「企業家的な推測のテストや新しい構造的な知識の生成を容易にする自生的に進化した一連の諸制度（下線原著）」[*ibid.* : 290] としてとらえている。このような視点からは、同じ企業家活動から市場過程を論じるカーズナーの議論のように、外生的に与えられたギャップを発見させそれを利益という誘因をもって企業家に解消させていく制度としての市場ではなく、企業家的知識の形成とそれに伴う企業家的学習を主体的に行える制度として市場をとらえていることが見て取れる。

様々な企業家的理論に基づく企業家活動は、このような市場制度の下で、消費者による選択と他の企業家との競争という環境にさらされるのであり、その結果は利潤ないし損失という形で現れる。この時、利潤は特定の市場状況に対する企業家的知識の適応度の高さ（損失は適応度の低さ）を示す指標となる。ハーパーの述べるように、構造的な不確実性の下では、市場状況の変化を完全に予測することはできないので、どのような市場状況の下でも成功する企業家的理論を構築することが重要なのではなく、むしろどのような市場状況の下でも適応することのできる企業家的知識を改訂する方法、すなわち企業家的学習、を構築することが重要となる。

それでは、市場制度の下での企業家的学習とはどのような過程を持つのか。第一に、「(例えば競合する企業家的アイデアといった) 試行を生み出す特定の手段と、錯誤を排除する特定の方法(すなわち試行を制御する特定の方法)を必要とする問題解決過程」[*ibid.* : 281] を伴う企業家的知識にとって、市場は利潤と損失(ま

たは利潤ないし損失の変化)というシグナルを送り、錯誤を排除する制度として重要性をもつ。すなわち、利潤と損失という市場のシグナルを通じて、現行の企業家的知識に基づいて遂行すること(あるいは遂行しようとする計画)と、実際の市場における買い手や売り手が望むこととの違いに気づく。

このような、市場によるシグナルを契機として、(1)解決すべき問題の定義→(2)問題に対する解決策の創出→(3)試みられた解決策に対する評価→(4)解決すべき問題の再定義→……という過程をもって企業家的学習が遂行される。(1)から(2)の過程では、個々の企業家が自らの批評的想像力に基づいて、解決すべき問題は何かでありその時にどのような解決方法があるのかという問題状況を自ら同定することになる。(2)から(3)の過程では、競合する企業家的知識と比較して、どれほど自らの企業家的知識が自ら定義した問題を解決するものとして機能しているかについて評価を受けることになる。(3)から(4)の過程では、自らのまたは競合する企業家活動に対する評価を通じて、自らの企業家的知識に対する再評価を行う。

ただし、企業家的知識のどの要因が成功ないし失敗をもたらしたのかについて、その競争者ばかりでなく当の企業家もまた完全に把握することはない。このことは、企業家的競争での独占力の源泉となるが、その一方で成功した企業家は自らの成功の決定的な原因を同定することができないということを意味する。個々の主体にとっての最適な企業家的知識の構成要素について知りえない環境の下において、社会制度としての市場は最適な企業家的学習の方法を市場参加者全体で探していくことのできるものとしての重要性を持つことになる。

4. おわりに

市場とは、売り手と買い手とが特定の商品を取引する場またはそこでの交換関係にすぎない。しかしながら、このような市場が経済社会に組み込まれている市場経済の下では、市場は取引価格の決定機関とは別の社会制度としての存在意義をもつことになる。本稿では、このような点について、企業家活動と市場との関係から見てきた。

市場によって形成される競争的秩序についてのハイエクの議論は、市場という社会制度を組み込んだ市場経済が個々の主体に何をどれだけ生産すべきかを指令する計画経済よりも高い性能をもつということを示す。ハイエクによれば、経済活動をする上で当初から「どんな種類のモノやサービスが求められているのか、あるいはそれらがどれほど緊急に求められているのか」[Hayek 1978; 181]といったことについての十分な知識・情報を持っているわけではないので、適切な知識・情報を獲得しようとする探索活動が必要となる。ハイエクによる市場経済の計画経済に対する比較優位は、このような探索活動を遂行する上で指令を行う中央当局よりも市場の必要性の高さに由来する。

ハイエクが述べるように、「すべての経済適応は予期しない変化によって必要とされる(下線原著)」[Hayek 1978; 181]。言い換えれば、将来の市場状況だけではなくそれがどのように変化するのかについても完全に予測することはできない。だからこそ社会制度としての市場に存在意義がある。カーズナーやハーパーに共通する点は、企業家活動を議論する上でこのようなハイエクの視点を共有していることにある。すなわち、予期せざる市場状況の変化それ自体に自らの存在意義を見いだす企業家にとって、市場という社会制度の存在が必要不可欠である。

しかしながら、両者の企業家活動と市場との関係性は次のように異なる。カーズナーは、予期せざる市場状況の変化を未利用の利益機会の

存在としてとらえ、それを発見することのできる能力を企業家的機敏性としている。このような形で、企業家活動と市場の相互補完性をとらえる。彼の議論は、企業家的機敏性の重要性を議論することそれ自体によって市場の存在意義を示すことになっている。それに対してハーパーはどうか。ハーパーもまた、市場の存在意義を企業家活動から説明している。しかし、そこでの企業家活動とは企業家的意思決定と企業家的学習という一連の過程を指すのであり、この過程を遂行する上で市場が必要不可欠であるとすると異なる。

カーズナーとハーパーとの違いは、次のような利益機会の違いにあるとも言える。前者は利益機会が予期せざる変化にさらされる市場に潜在する。後者は利益機会が変化する市場の状況を認識する枠組みである企業家的知識に潜在する。特にハーパーの議論は、意思決定過程のなかに企業家的要素を見いだした点に特徴があり、企業家活動ということから市場と企業との関係に対する新たな視座を提供する。

われわれは経済活動のどのような側面をもって企業家的であるとしているのだろうか。あるいはそもそも企業家活動を議論する必然性はどこにあるのだろうか。本稿では、市場経済の下での市場の存在意義に関わる側面からこの問題に答えた。しかしながら、企業家活動とは何であり、その企業家活動を議論する必然性は、市場だけでなく市場経済の下での企業の存在意義に関わる側面からも検討する必要がある。例えば、シュンペーターの議論のようにイノベーションを検討する上で、市場だけでなく企業の存在に関する議論も必要となるからである⁵⁾。コースの議論や本稿でとりあげたハーパーの議論とともに、企業家活動と企業との問題についてはあらためて検討していく必要がある。

*本稿の執筆にあたり、北海道大学大学院経済学研究科西部忠助教授から有益な指導・コメントを頂いた。北海道大学における社会経済学研究会での草稿段階からの貴重なコメントも併せて、この場を借りて感謝の意を表したい。

5) 企業家活動からの企業の存在意義を論じる点については、ひとつはイノベーションを企業家活動の特徴ととらえたシュンペーターの議論からみることができる。シュンペーターによる企業家活動は、発明・発見された技術を経済的に合理的であるか否かではなくて技術的に合理的であるか否かという評価からはじまる。そして、ローゼンバーグ (1976) が指摘するように、発

明・発見の時点からそれが商品という形に現れるまでの過程には一定の期間を要する。したがって、イノベーションの過程は資源・時間浪費的であり、資源・時間節約的な市場の過程と相反する性質をもつ。シュンペーターの議論からはこの点に企業の存在意義を見いだすことができる。

参考文献

- ・邦文文献
- 池本正純 [1984] 『企業者とは何か』有斐閣選書
- 井上義朗 [1999] 『エヴォルーションナリー・エコノミクス：批判的序説』有斐閣
- 越後和典 [1985] 『競争と独占：産業組織論批判』ミネルヴァ書房
- 尾近祐幸・橋本努編 [2003] 『オーストリア学派の経済学：体系的序説』日本経済評論社
- 平井俊顕 [2000] 『ケインズ・シュムペーター・ハイエク：市場社会像を求めて』ミネルヴァ書房
- ・英文文献
- Boulding K. [1966] “The Economics of Knowledge and the Knowledge of Economics”, *American Economic Review*, 56(2), 1-13
- Burczak Th. [2002] “A critique of Kirzner’s finders-keepers defense of profit”, *The Review of Austrian Economics*, 15(1), 75-90
- Butos W. N. and Boettke P. J. [2002] “Kirznerian entrepreneurship and the economics of science”, *Journal des Economites et des Etudes Humaines*, 12(1), 119-130
- Casson M. [1982] *The Entrepreneur: an Economic Theory*, Edward Elgar
- [1990] *Entreprise and Competitiveness*, Clarendon Press
- Dow S. C. and Earl P. E., eds. [1999] *Economic Organization and Economic Knowledge: Essays in Honour of Brian J. Loasby*, Vol. I, Edward Elgar
- Foss N. J., ed. [1997] *Resources Firms and Strategies*, Oxford University Press
- Foss N. J. and Klein P. G., eds. [2002] *Entrepreneurship and the Firm*, Edward Elgar
- Foss K., Foss N., Klein P., and Klein S [2002] “Heterogeneous capital, entrepreneurship, and economic organization”, *Journal des Economites et des Etudes Humaines*, 12(1), 79-96
- Fu-Lai Yu T. [2001] “Entrepreneurial alertness and discovery”, *The Review of Austrian Economics*, 14(1), 47-63
- Harper D. A. [1996] *Entrepreneurship and the Market Process: an Enquiry into the Growth of Knowledge*, London: Routledge
- Hebert R. F. and Link A. N. [1982] *The Entrepreneur: Main Stream Views and Radical Critique*, New York: Praeger Publishers (池本正純・宮本光晴訳 [1982 = 1984] 『企業家論の系譜：18世紀から現代まで』ホルト・サウンダース)
- Hayek F. A., ed. [1935] *Collectivist Economic Planning*, London: George Routledge and Sons; reprinted in Hayek [1948], 119-180
- [1937] “Economics and Knowledge”, *Economica* 4; reprinted in Hayek [1948], 33-56
- [1945] “The Use of Knowledge in Society”, *American Economic Review* 35(4); reprinted in Hayek [1948], 77-91
- [1946] “The Meaning of Competition”, *The Stanford Little Lecture*; reprinted in Hayek [1948], 92-106
- [1948] *Individualism and the Economic Order*, London: Routledge and Kegan Paul (嘉治元郎・嘉治佐代訳 [1948 = 1990] 『個人主義と経済秩序』春秋社)
- [1978] *New Studies in Philosophy, Politics, Economics and the History of Ideas*, University of Chicago Press
- Horwitz S. [2002] “Entrepreneurship, exogenous change, and the flexibility of capital”, *Journal des Economites et des Etudes Humaines*, 12(1), 107-118
- Hoselitz B. [1951] “The Early History of Entrepreneurial Theory”, *Explorations in Entrepreneurial History*, April 15, 193-220 in Spengler and Allen [1960] 234-257
- Ikeda S. [1990] “Market-Process Theory and “Dynamic” Theories of the Market”,

- Southern Economic Journal*, 57(1), 75-92
- Kirzner I. M. [1973] *Competition and Entrepreneurship*, Chicago and London : The University of Chicago Press
- , ed. [1982] *Method, Process and Austrian Economics : Essays in Honor of Ludwig von Mises*, Lexington Books
- [1992] *The Meaning of Market Process : Essays in the Development of Modern Austrian Economics*, London and New York : Routledge
- [1996] *Essays on Capital and Interest : an Austrian Perspective*, Edward Elgar
- [1997] *How Markets Work : Disequilibrium, Entrepreneurship and Discovery*, the Institute of Economic Affairs (西岡幹雄・谷村智輝 [1997=2001] 『企業家と市場とはなにか』日本経済評論社)
- [2002] “Comment on “A critique of Kirzner’s finders-keepers defense of profit””, *The Review of Austrian Economics*, 15(1), 91-94
- Knight F. H. [1921] *Risk, Uncertainty and Profit*, Beard Books ([1921=1959] 奥隅栄喜訳『危険・不確実性および利潤』文雅堂銀行研究社)
- Langlois R. N. [2002] “Kirznerian entrepreneurship and the nature of the firm”, *Journal des Economites et des Etudes Humaines*, 12(1), 97-105
- Lavoie D. [1990] “Computation, incentives, and discovery : the cognitive function of markets in market socialism”, *Annals of the American Academy of Political and Social Science*, 507, 72-79
- Lewin P. [2001] “The development of Austrian economics : revisiting the neoclassical divide”, *The Review of Austrian Economics*, 14(4), 239-250
- Lewin P. and Phelan S. E. [2000] “An Austrian theory of the firm”, *The Review of Austrian Economics*, 13, 59-79
- Loasby B. J. [1999] *Knowledge, Institutions and Evolution in Economics*, London and New York : Routledge
- Machlup F. [1958] “Equilibrium and Disequilibrium : misplaced concreteness and disguised politics”, *The Economic Journal*, 68, 1-24
- Metcalfe S. and Warde A., eds. [2002] *Market Relations and the Competitive Process*, Manchester University Press
- Mises L. [1966] *Human Action : a Treatise on Economics*, Henry Regnery Company, Chicago (村田稔雄訳 [1966=1991] 『ヒューマン・アクション』春秋社)
- O’Driscoll G. P., Jr. and Rizzo M. J. [1996] *The Economics of Time and Ignorance*, London and New York : Routledge (橋本 努・井上匡子・橋本千津子訳 [1996=1999] 『時間と無知の経済学：ネオ・オーストリア学派宣言』勁草書房)
- Rosenberg N. [1976] *Perspectives on Technology*, Cambridge University Press
- Schumpeter J. A. [1934] *The Theory of Economic Development : an Inquiry into Profit, Capital, Credit, Interest and the Business Cycle*, Harvard University Press (reprinted in 1982) ([1926=1977] 『経済発展の理論 (上) (下)』塩野谷祐一・中山伊知郎・東畑精一訳 岩波文庫)
- [1950] *Capitalism, Socialism and Democracy*, London and New York : Routledge ([1950=1995] 『資本主義・社会主義・民主主義』中山伊知郎・東畑精一訳 東洋経済新報社)
- [1989] *Essays ; on Entrepreneurs, Innovations, Business Cycles, and the Evolution of Capitalism*, Transaction Publishers
- Spengler and Allen, eds. [1960] *Essays in Economic Thought : Aristotle to Marshall*, Rand McNally and Company
- Swedberg R., ed. [2000] *Entrepreneurship*, Oxford

University Press

- Vaughn K.I. [1994] *Austrian Economics in America*, Cambridge : Cambridge University Press (渡辺 茂・中島正人訳 [1994=2000] 『オーストリア経済学：アメリカにおけるその発展』学文社)
- Witt U., ed. [1992] *Explaining Process and Change : Approaches to Evolutionary Economics*, The

University of Michigan Press

- [1996] “Innovations, externalities and the problem of economic progress”, *Public Choice*, 89, 113-130
- [2002] “How evolutionary is Schumpeter’s theory of economic development?”, *Industry and Innovation*, 9 (1-2), 7-22